



近世說

年錄 初編 二



~ 13
3567
2



門 13
號 3567
卷 2

近世説美少年録第一輯卷之二

東都 曲亭主人編次



賊巢を突く弘元連盈を捕ふ
蛇穴を焼く義興禍胎を遺す

紹前編復説備中弘元川角頼太連盈が洞の前後を捕籠り脱免をせし
山賊ホと或の砍伏せ或を生拘るその隊の勇卒三千餘名奮撃突戦術を
推けがられ小間いさるけり有之程小連盈の透を圍ひ殺脱んとく憑切を
下の山賊十名あまの前後小立しく這脱路より出んとす弘元これを借て
彼免まると下知くは烈し声と共侶小遮留る寄りの兵競其鬼る物もせ
先立る五六賊も小く刃を抜晃りて要要時の挑戦小の多賊徒の既小待
場の野猪の笠前面の安心地しく只管路を殺用んとす足並走ると大疾着

早稲田 大學 図書館
昭和 34.6.3 購
藏 書

のもかく。研立られ追籠られ。ゆゑに故の脱穴へ入らんとす。寄多の兵透間を
 跟入り。數も留んと進む。件洞の中より。川角頼太連盈が。數も出。鳥銃の
 先を進。一兩人矢庭の數もれ。仆せ。是時鳥銃の尚世間。あつた。只筑
 紫る。嶋人の近曾私に傳へ。舶来新渡の火器を。誰う。恐る。怖れ。寄
 多のこれ。避易し。と左右へ。發と退。うける。透を。ぬ。と連盈。阜冬。蝕。の。脱穴より
 跳出。足。信。と逃去んと。する。程。弘元。を。これ。を。渠。必。連盈。んと。思。声。を
 鳴り。立。川角。等。と。呼。被。と。連盈。遙。か。え。と。引。提。言。鳥銃。鉄丸。を。意。んと。合
 直。と。程。も。あ。む。弘元。が。下。と。數。も。銚。鏡。の。寬。以。違。つ。と。連盈。右。の。腕。を。打。傷。ら。れ。て
 裏。哩。と。落。と。鳥銃。の。石。小。當。ら。う。溪。川。の。深。底。に。沈。ま。け。既。中。に。弘元。賊。の
 神器。を。打。落。せ。一。六。其。舊。直。小。走。寄。多。と。連盈。の。肩。よ。せ。下。と。左。に。弘元。引。抜。く
 銚。鏡。の。矢。声。を。う。け。く。數。も。返。ま。を。弘元。騒。が。身。を。外。と。く。刀。の。柄。も。受。留。め。進

蒐。れ。連。盈。刀。を。抜。く。砍。んと。ま。を。抜。も。引。結。り。さ。れ。連。盈。も。首。を。は。猛
 者。を。の。け。れ。骨。性。ま。で。上。り。下。り。且。く。相。撲。ひ。腕。小。深。瘡。を。負。た。り
 けれ。終。小。の。膝。小。組。布。れ。と。反。又。さん。と。揺。撥。程。小。寄。多。の。兵。五。六。名。折。累
 多く。動。を。押。へ。索。を。被。け。り。是。時。多。の。小。賊。十。の。數。も。れ。る。は。三。十。餘
 名。生。拘。十。名。小。餘。り。一。六。辛。く。と。脱。れ。も。の。兩。三。名。小。過。さ。り。け。り。は。れ。寄。多。の
 雜。兵。も。瘡。眉。ぶ。る。の。る。は。あ。な。と。彼。鳥銃。も。數。も。れ。一。の。小。幸。ひ。あ。り。と。死。小
 至。と。却。説。弘元。の。洞。の。前。門。を。攻。め。た。隊。兵。も。あ。り。聚。合。と。功。あ。る。故。茶。言。め
 疲。勞。れ。る。と。勞。ひ。且。被。傷。者。亦。と。勅。る。小。茶。の。准。備。あ。ら。ざ。れ。ば。亦。も。心。つ。と。り
 あり。と。の。素。院。六。丈。婦。が。贈。り。くる。草。葉。を。推。搦。く。と。の。瘡。口。も。布。さ。せ。み。食。立。地
 疼。痛。去。く。幾。程。も。愈。小。け。り。左。右。ま。る。程。も。あ。の。目。も。既。に。暮。小。けれ。ば。雜。兵
 亦。の。樹。枝。を。伐。り。通。宵。火。を。焚。く。生。虜。を。守。り。と。曉。る。と。俟。み。春。の。宵。も。れ。は

短くて東の山支のあらむ比弘元猛小下知まらむ彼鳥銃とりいひの世小跡く
覚る小底を撈り取り揚よとく水煉を流る雜兵を溪川を下立と半日たり
流獵せしあ川の湍の早けれ推流され失ふけんぞ得むく已ふけり
現物の流行者時至る後世小出ま鳥銃いれよりと二千一の春秋を歴て
天文八年の比よりとる軍器をるかけは問話休題の日又弘元の隊兵ホ
と共に連盈が住做する洞中小入てるまは二四百兩の金銀ありの餘調度
衣食の類酒器散子るて至るま物みるありとふとふ登時弘元を隊
兵ホとる今この洞を毀むの後又山賊の巢穴とることとらむかれ山
木と伐と焼崩えと必ふされ金銀の國に至宝玉石と傷ま棄てあむ這
財帛を取出と如此々々小せと指示せ隊兵ホのえと形を相計
しと樹を伐と前後の洞門を焼崩ま右の墨一門戸るれもの石悉
焼碑は前後の口を埋め復入るもあむけとあれらの亥小時移り日景
斜ゆる弘元の隊兵ホ生虜を牽く麓を下らんとする程は連盈の右の腕
深痰を肩るて最も緊く綁られとささる越と懸ると段々とも
猛入る苦痛堪堪りけん昨夜通宵嘔吐が日途ゆく死なりの口これら小
あむく深痰を肩る生虜の死するの五六名小及びくわむ皆棄て
るて連盈をの頭を捕と雜兵小齋く生虜をて賊を牽くと
當夜の麓より程遠う道場を宿を投め爰ゆく京軍の安否を問
ふ小大將大内殿の既の諸軍勢を牽く阿蘇の古城へ寄せひといふ
風聞定ると弘元類る焦燥くこれら連盈も追捕のる小
日過ると這回菊池征伐の期小後れ急送恨るん羽立未明小立出く
夜を日小然りとんとこの曉も宿を出る馬の足掻と早めけり叔も昨夜

美山録 録二

三

弘元ホが旅宿の貧院よりければ三千餘名の主従を數待せ給糧ありし
其の時すくも彼草葉の効能をゆめは變らね弘元も勝兵ホもこれを故り
食小極くその夜優に睡りて氣力の此も衰を給との以恰との以素它六
夫婦が肥のれれ食の恩義を感つて只管路を志急ける。案下某生
復説大内左京權大夫義貞もその日大宮司の宿所より阿蘇谷の陣
更り來り大伴親春太宰教頼ホと譚する。武俊を山之城を渡して
當國は賊徒あり者ハ幸洛へ更り來り。練の趣を言上せん各々も某と
共侶の上洛しく。這里の保微たるを原田以下の人々の當國の守護
身暇をせん。即原田山鹿守佐千手酒殿立石ホ諸隊の主將を
本陣に招き聚る件を説き。各位の是よりく采邑より勿論
時々穿鑿を武俊が所在を知らし速に推寄り討果えり肝要ありあ

美もあらぬゆへ。と云ふ衆皆一議め及ぶ。言兼く退る。その明日阿
蘇谷の陣歸り。己が知る居城を還りけり。然る大内等の三將も歸洛
大軍の要ありと。隊兵過半の本國に返し遣。僅小四五千の人馬を
蘇沼まぐ退ける。不題阿蘇沼辨才天の別當を鱗角院法橋と喚做
たはが御高義貞が。大軍を招き沼上陣せし。當社の菊池光建立
たるゆへも。這里武俊が事の起りより出家されども。舊日縁の宗を
怕れし出も迎へむ。姑く山林に籠り。事の容を窺ひ。武俊の來り落亡
阿蘇山の城を破却せられ。摠大將義貞も。又大伴太宰の兩將と共に
阿蘇沼の邊まぐ退る。その時鱗角院も。鱗角院も。鱗角院も。鱗角院も。
坐の憚あれが。姑く影を躲せり。武俊既落亡され。寄り刃小鯨ら。七
當國を治り。又大内殿の當社近く陣し。あふを知り。迎接の美あり

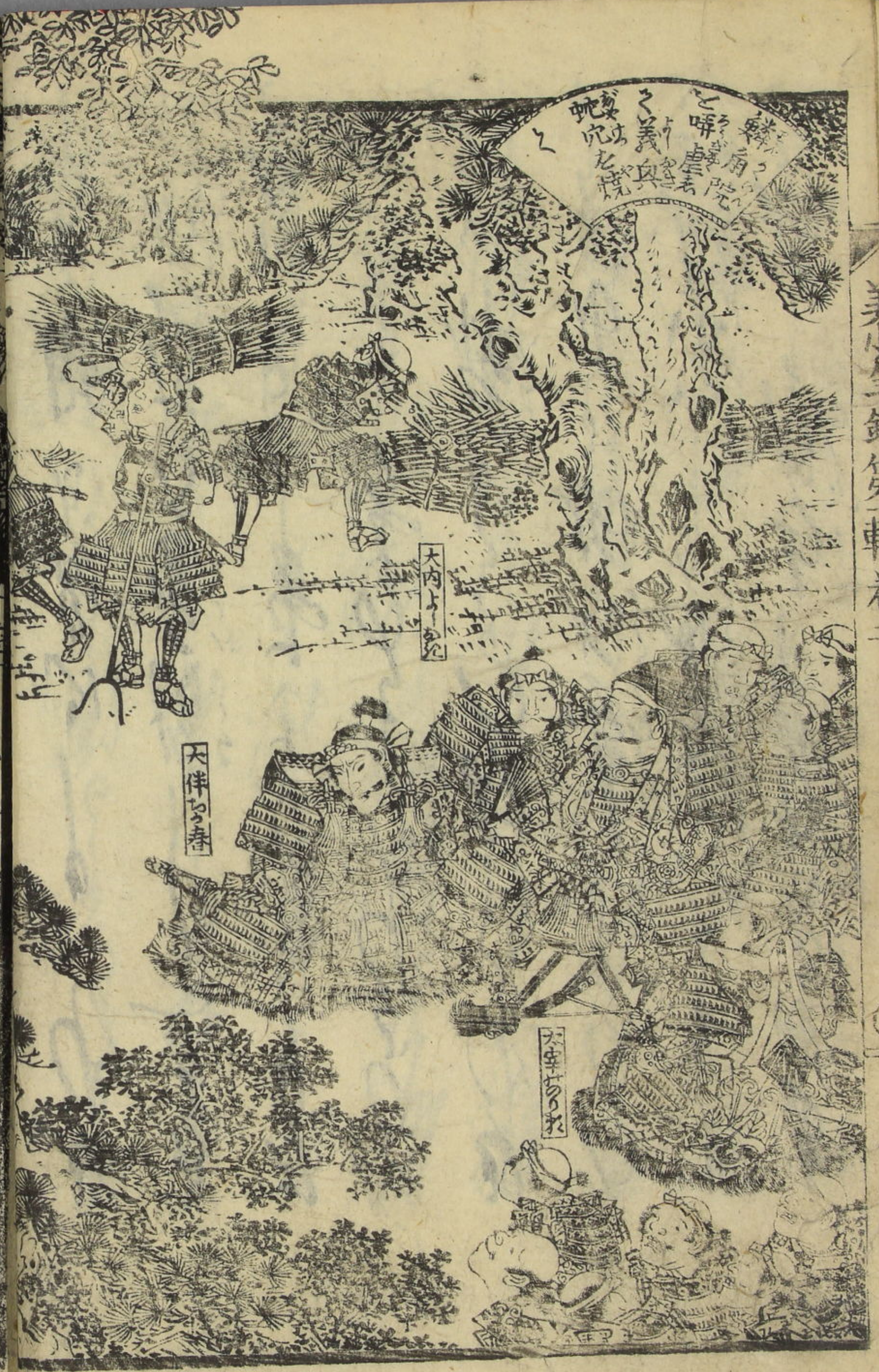
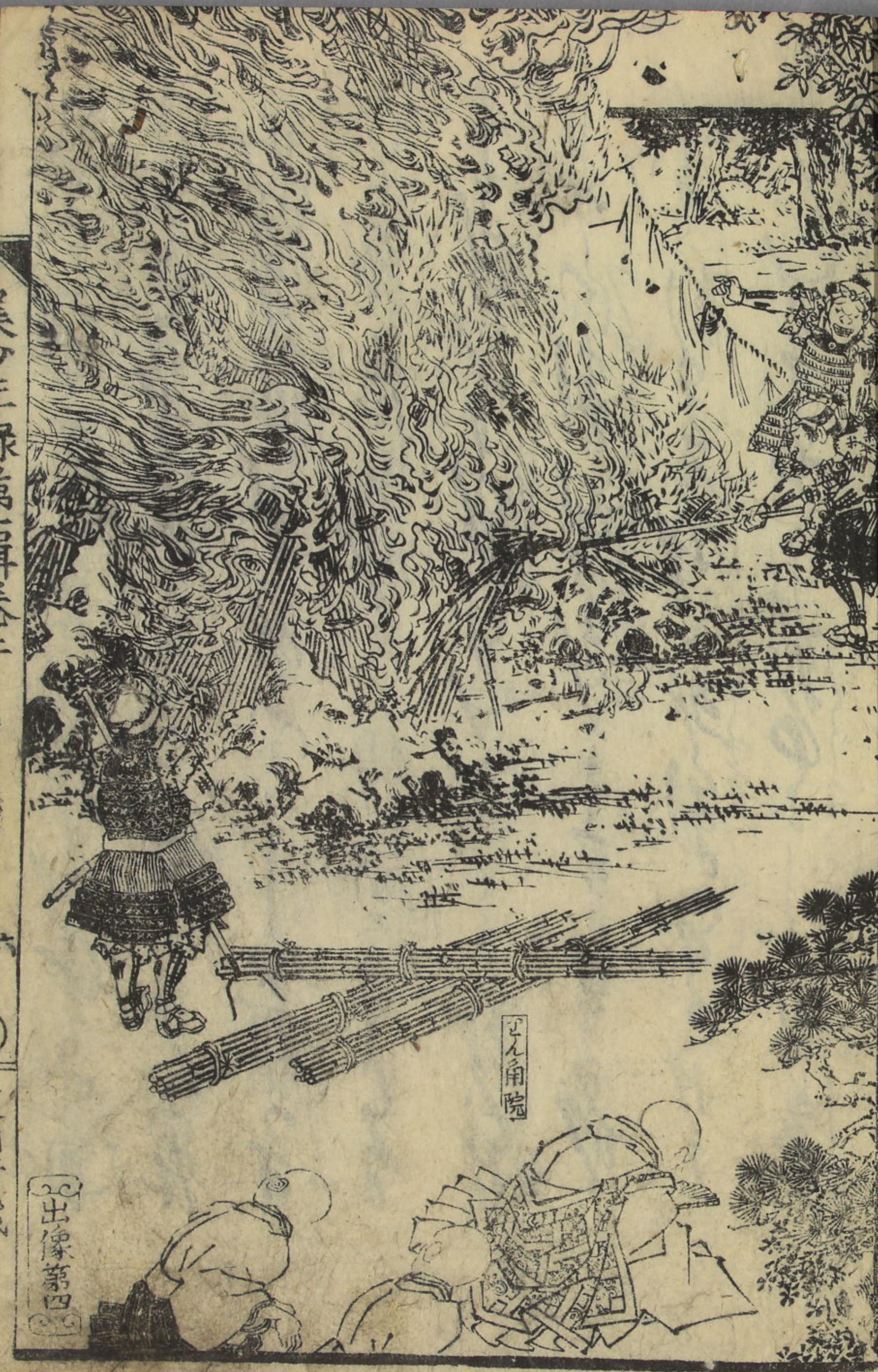
及びむら更の後日外各めり遭ん彼これ亦影護り後むら菊池氏建
立せられ神社ありともこれ武俊が謀反の謀中の一毫も興らざらん
出る處に二つありの舊縁ありとく首を口よりとらわらど何日
出迎ふ不儀をささげんと尋思せり宿院に立入り西箇の徒弟城後へ義
貞の陣より起んたる日大内義興と身近死士率百名をり親春教頼
等と共に沼上を徘徊し遂に辨天の社頭より来るあふ林几を立
談しくあつければ鱗角院の便宜を語り即大内家の近臣小由と
与しと云と陳し其筋を披露し及びり是より義興と鱗角院を召
近づけ社頭より対面し主文易勢以異なり鱗角院のあそく帰陣に
祝詞を述べける義興と冷笑ひく某御中この所軍兵を叱せし院主と
絶く出迎へむ武俊を落亡せし筋を退陣のけふ及びく出せむら

かゝる當社の林池武光が時建よりあつたあり院主武俊見負の人
今も舊縁を思ふもの旗色をん為遅参するのる下然のそある
いふをぞと詰問せし鱗角院のあそく頭を擡げ搥大將上在と貧道
いささまで正意を仕り脚談を以ども當社の初菊池氏の建立より
いささの歳月を歴くいよ子孫の祖の心ふ似む信仰疎るのそ
兵乱の社壇の荒果しと修復を死すまもるければ御中を券縁せん為
貧道師弟他御ありあそく見参入りのゆゆしと御下向のそ
くまの帰院仕るる趣賢察有る省免を願ふのそ南無阿弥陀仏と念
まれの義興頭をうち掉り理めりくを釋せし実支えとのあひども
かゝる當社の菊池が祈願所より逆徒を守護の神を問むと定

這回武俊追討の序次をりく毀奪んこの美をあらはれよ鱗角院

美の三録 第一 二 三

五



美少年録第二回卷二

美少年録第二回卷二

美少年録

驚驚とあち物体るたるを兼りゆさるるや菊池が建立てる所安
藝州嚴嶋の神と一体に菊池氏の滅亡の當社の見放ゆけんを初を追て
今ゆるふ神社を毀せんとす。と憚ふ心も感心ある下知なき後古
例をわひひし。築紫の廣嗣東の將門逆惡謀及の骨張るり。も死後忠
神小齋もその神社に今もあり況當社の類もあらざむ。菊池の建立
たりとも。今の菊池は物と云い寛容のえ沙汰と願ひなるのこへをとどめ入るを
口説て。現を言の理りる。側なき親春。太宰少貳。目を注して。齊一
義貞を誅する。菊池の由ある神社を破却せんと宣ふを傾けまうは。あ
福も別當の陳する。亦捨る死所あり鬼神の敬と遠さく。元來等々
征伐を加ふる。物体る。賢慮を旋する。と迭代に寛解る。義貞
僅に領る。趣の意をゆる其え。權威を誇りて。神を神とせさ
るふあ。を鱗角院の遷る。と疑く。あ。を。試ん。為ふ。の。言の
あ。及。る。人。本。社。の。大。の。尺。小。を。措。く。の。を。許。ま。と。も。免。れ。な。ら。な。い。當。社。の
彼。毒。蛇。の。こ。か。り。齋。の。某。諸。將。と。共。の。外。陣。せ。折。る。夜。沼。水。猛。暴
ま。と。く。人。馬。を。毀。損。傷。れ。の。件。の。神。の。祟。る。と。人。喋。々。と。食。ひ。り。大。蛇。を
われ。鬼。ゆ。せ。逆。徒。の。討。と。奉。り。義。貞。が。軍。兵。を。害。せ。り。の。れ。邪。神。の。と
毒。蛇。を。退。治。と。士。卒。の。魂。を。祭。ら。ん。と。豫。く。り。思。ひ。す。阿。蘇。谷。の。の
外。來。ぬ。途。ゆ。燄。硝。硫。黄。の。火。其。と。買。取。せ。且。その。と。る。樹。を。伐。し。て
薪。も。毀。准。備。せ。り。の。件。の。毒。蛇。の。穴。の。の。社。頭。の。わ。り。東。の。か。く。の
年。あ。り。て。虚。ふ。かり。の。櫃。を。と。る。件。の。穴。を。あ。り。命。立。遠。り。と。索。結。と。
辭。せ。り。下。知。ま。る。と。鱗。角。院。推。禁。と。の。慌。る。言。を。戦。い。憤。り。の。上。に
から。白。蛇。の。神。の。天。驗。あ。り。と。祈。り。の。の。利。益。と。素。是。雌。雄。の。白。蛇。と。大。約

るふあ。を鱗角院の遷る。と疑く。あ。を。試ん。為ふ。の。言の
あ。及。る。人。本。社。の。大。の。尺。小。を。措。く。の。を。許。ま。と。も。免。れ。な。ら。な。い。當。社。の
彼。毒。蛇。の。こ。か。り。齋。の。某。諸。將。と。共。の。外。陣。せ。折。る。夜。沼。水。猛。暴
ま。と。く。人。馬。を。毀。損。傷。れ。の。件。の。神。の。祟。る。と。人。喋。々。と。食。ひ。り。大。蛇。を
われ。鬼。ゆ。せ。逆。徒。の。討。と。奉。り。義。貞。が。軍。兵。を。害。せ。り。の。れ。邪。神。の。と
毒。蛇。を。退。治。と。士。卒。の。魂。を。祭。ら。ん。と。豫。く。り。思。ひ。す。阿。蘇。谷。の。の
外。來。ぬ。途。ゆ。燄。硝。硫。黄。の。火。其。と。買。取。せ。且。その。と。る。樹。を。伐。し。て
薪。も。毀。准。備。せ。り。の。件。の。毒。蛇。の。穴。の。の。社。頭。の。わ。り。東。の。か。く。の
年。あ。り。て。虚。ふ。かり。の。櫃。を。と。る。件。の。穴。を。あ。り。命。立。遠。り。と。索。結。と。
辭。せ。り。下。知。ま。る。と。鱗。角。院。推。禁。と。の。慌。る。言。を。戦。い。憤。り。の。上。に
から。白。蛇。の。神。の。天。驗。あ。り。と。祈。り。の。の。利。益。と。素。是。雌。雄。の。白。蛇。と。大。約

夏四月より秋九月の比まら穴を去る沼の底あり又冬十月より春二月の比まら沼を去る穴の中あり雌雄のくま穴より出く沼水を飲めんとするぬゆども怕れて近くよらばとりの倘其方に向く尿ること不浄の所行戒るまのあれは立地の祟を受く病煩をよとる一穴の禿舎を相距る五六十間ありと大なる櫃あり只今中も當せ餘十人抱くもる月餘りある巨樹るがその虚の中を春冬に栖せぬるれは靈蛇をのりて輒く退治せられんや非如管領の威徳の焼亡一もとの後の祟をのりてせぬとひ止りありと辨を盡しと諫を義兵聽く声を苛立復しと諄々と毒蛇と神と敬への愚民を惑せま買僧の奸計武弁の人の欺れんやこの説を禁めぬあら穴の焼草ふるまの毒蛇の祟をのりてとる軍令を用ひむや奈何々と教圍る面色凄りりれが鱗角院の怕惑ひくさび口を

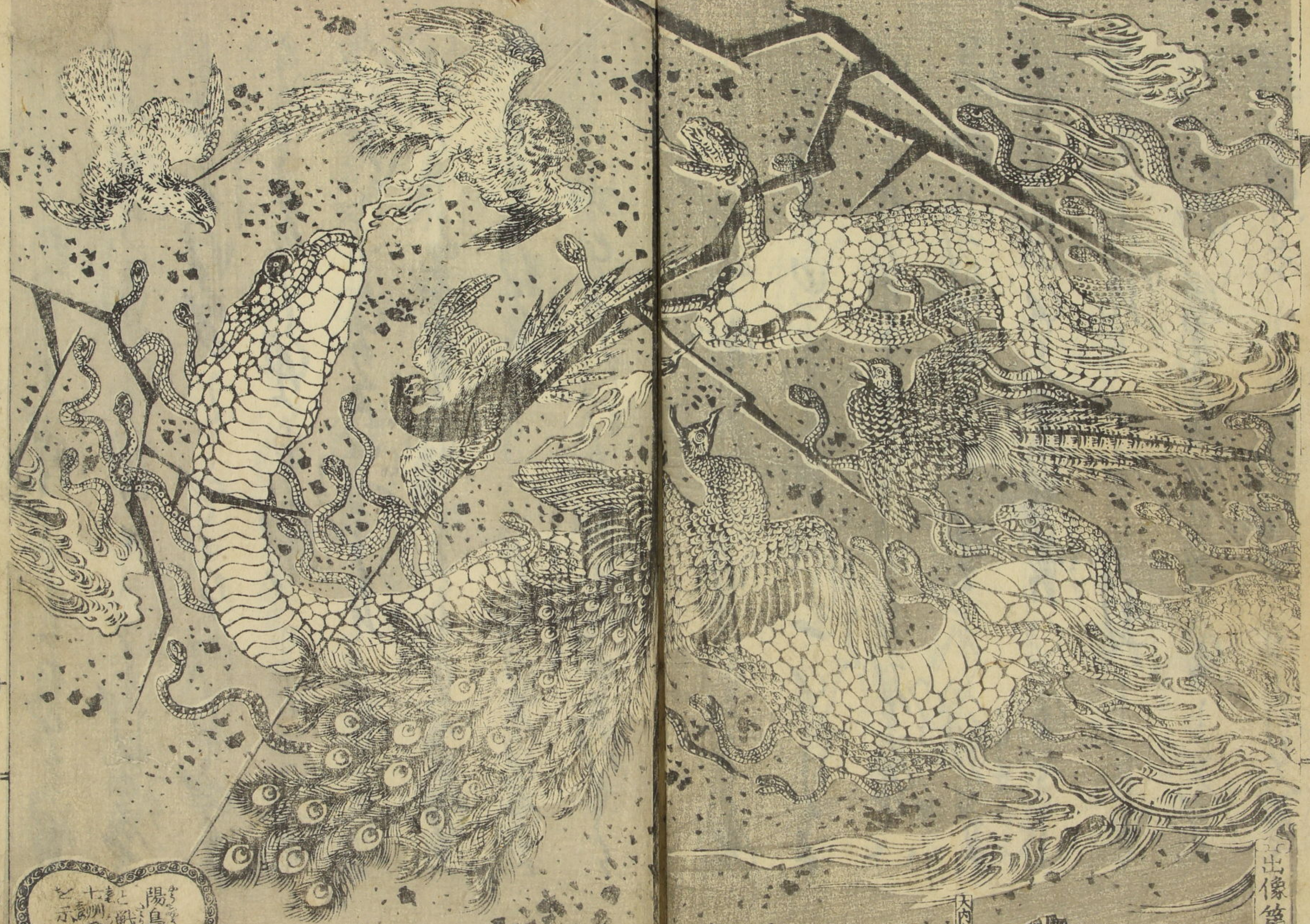
因に治を大伴太宰の西將も權小怕れ威小憚りて寔然と答るのさ又のさすもるのさすもるさ率のまぐ鬼胎を抱くぐての要時立難しと義兵頗る焦燥て者共るを猶豫せる毒蛇が沼ふる折るる輒く退治さるらん或今るは春の本ふるれ先居ると疑ひる一まぐせばやと牀几を放ち櫃の邊よ赴くゆと親春も教頼も野の士率共侶の後方小跟と俱一ゆけ鱗角院も徒弟と抱くもる下所小取合らる當下大内義興と仰せ件櫃をる幾歳月を経るけん枝の四方は茂あひく瓢形の目景を遮り幹の幾間ゆ廣り柱て朽く虚ふるる内中席拾枚をる敷へ東西まぐ出る大枝の注連を引渡り下下の編小る雜物を建てる義興とて冷笑ひく者共るを焼草を虚の内小積容れく焼殺さる疾くと猛く烈火に主命小雜兵小のさる準備の薪燧硝硫黄を扛擔ひ來り樹の虚へさるともる投入て火を殺し焼立

義典録の十及をり西のく不遠空く瞬もせむ日成とる然程の猛火燭と
 たる餘を佳火烈燄漸々不立升と大枝細條を焼落を勢ひいふるもわら
 ざる小虚の内餘外積累のく新の硫黄焰硝をすくこれの焔燄たは音
 凄しく煙の虚空の布満く有頂天も届く燬と四下の壤を焦とその
 无垢坤軸も通るべしと覺と人命魂を落し骨を潰さるといふのちたは
 其新盡んとするといひ義典下知と初より有野野焼草を虚内へ投入れ
 せと此も回断あるところけむ甚なる靈蛇神龍のとも免れ果べうとをえ
 べりけり如是而燔と焼く程の己牌の初より申の比及びりも稀
 る大櫃の火无の至る限もるけれ終小餘を焼摧け灰燼とちを
 倒る折る倏忽大地震動と真然なる物響音壁の百千の雷電の一度の
 墜て霹靂如く如く穴の中より兩道の白氣忽然と煙を衝と立升るとは
 程の兩箇の白蛇と煙の中を顯れるその長各廿仞あまり真白蛇を引る如く
 翻翻とく東へ靡れ西へ流るる凶蛇の浩処は沿上より最美女山雞と淫
 もげる雄野雉と着羽高く翔出と件の白蛇を追んとを登時白蛇の身中より
 薄黒色を兩箇の蛇走り出渡留と件の鳥と戦ふ程又野の小蛇共空
 中を顯れとる開戦と援けり山雞野雉うち肩く既危くをえ折又
 沿上よりの大蛇を雌鳩と一隻の錦雞翔翔と山雞野雉を力戮彼薄
 皂の兩箇の蛇と野の小蛇を追散と突落々々俱小白蛇を執んと然ども
 白蛇を怖る色を頭と擡舌と吐く四箇の鳥を吞んとり且挑争の程
 又西の方よりと形状鷲より巨大の鳥一隻の孔雀翔と山雞亦と相
 資けくを四方より捕籠く此角のく突くとる隨の兩箇の白蛇の四段とる
 地上廻の墜入ると時疾風吹暴れ砂を起と天色の朧々とする隨白蛇の

義典録 卷二

新撰

義典録
 卷二
 新撰



陽鳥陰蛇
 七瀬の魚
 と示す

新八巻
 輪廻
 二

出像第五〇〇



大内

ちうん五隻の鳥も何処か死けんた消え如く影がえをさるふけや思ふる後大
 内家の大奸雄の逆臣にて來て黨を樹主を怒りての家を倒さるる時
 義勇の少年あり又毒悪る少年あり怨を結び相刻。其良善の徒を百折
 千磨の艱苦を寫し必死の厄あり及ぶとも又西雄の俠客ありく善小與一悪を
 夷け世の英雄と相會して奸と鋤逆を滅し彼七州を討治めり是を前
 飛りての神をぬ身の誰か知るは只この奇異る光景を目前に平衆人の
 驚愕に怪ざるものなく後の出立と測りかひ今も安危を定めぬるく大伴太宰の両
 將の只音駭嘆するものも辞と出まのるけれは悍く勇は義貞の惘然と
 きて醉るが如く呆果る可る。折衷本齣説備中弘元は日者山賊
 連盈の首級を齎し生虜を牽しは隊兵三十餘名を招く阿蘇公の
 陣小赴死し大將義貞と大伴太宰の兩將と共侶にけの朝未明の陣
 歸志く阿蘇沼の邊まで退れぬより宮えみ迹を基み路を急ぎ今又とよ
 走著ぬゆふより義貞が天蛇の出宗を媚く出ひく蛇虎を焼くとの縛の趣を
 彼隊の士卒も皆驚き且驚死且占といひ義貞を諫んと是は陣門の入り
 きて直に阿蘇沼辨才天の雞栖前まで來ると死霊蛇の冤魂煙火の中
 より虚空遙か飛揚して五隻の鳥と戦ひての縛の為体を圖らる目撃す
 けれは主後齊一教萬の嘆とて怪まるといふ。就中弘元は此ひあまよりあれ
 ども心小秘く言小出さる事果て後社頭に入る義貞に見参るを念は義貞の
 嚮小當社を陣所小せと死不幸小と弘元が諫言暗小的中あるその宵
 沼昇の祟あり軍兵夥喪ひて意中小羞く弘元を憐れむと主後の又ら
 びるりて物怪の幸ひるといひり。誰か料ん弘元は隊兵三十餘名を
 皆恙るくゆり來ぬけれは義貞を飲む空竊小憎まといひを色ぬゆさる

ちうん五隻の鳥も何処か死けんた消え如く影がえをさるふけや思ふる後大
 内家の大奸雄の逆臣にて來て黨を樹主を怒りての家を倒さるる時
 義勇の少年あり又毒悪る少年あり怨を結び相刻。其良善の徒を百折
 千磨の艱苦を寫し必死の厄あり及ぶとも又西雄の俠客ありく善小與一悪を
 夷け世の英雄と相會して奸と鋤逆を滅し彼七州を討治めり是を前
 飛りての神をぬ身の誰か知るは只この奇異る光景を目前に平衆人の
 驚愕に怪ざるものなく後の出立と測りかひ今も安危を定めぬるく大伴太宰の両
 將の只音駭嘆するものも辞と出まのるけれは悍く勇は義貞の惘然と
 きて醉るが如く呆果る可る。折衷本齣説備中弘元は日者山賊
 連盈の首級を齎し生虜を牽しは隊兵三十餘名を招く阿蘇公の
 陣小赴死し大將義貞と大伴太宰の兩將と共侶にけの朝未明の陣
 歸志く阿蘇沼の邊まで退れぬより宮えみ迹を基み路を急ぎ今又とよ
 走著ぬゆふより義貞が天蛇の出宗を媚く出ひく蛇虎を焼くとの縛の趣を
 彼隊の士卒も皆驚き且驚死且占といひ義貞を諫んと是は陣門の入り
 きて直に阿蘇沼辨才天の雞栖前まで來ると死霊蛇の冤魂煙火の中
 より虚空遙か飛揚して五隻の鳥と戦ひての縛の為体を圖らる目撃す
 けれは主後齊一教萬の嘆とて怪まるといふ。就中弘元は此ひあまよりあれ
 ども心小秘く言小出さる事果て後社頭に入る義貞に見参るを念は義貞の
 嚮小當社を陣所小せと死不幸小と弘元が諫言暗小的中あるその宵
 沼昇の祟あり軍兵夥喪ひて意中小羞く弘元を憐れむと主後の又ら
 びるりて物怪の幸ひるといひり。誰か料ん弘元は隊兵三十餘名を
 皆恙るくゆり來ぬけれは義貞を飲む空竊小憎まといひを色ぬゆさる

弘元を坐右近く招死よむ。左に右をもち合笑を和殿と置る。沼原の宵
 隊兵と共に漂没あられせし人といひ。日比経とて。美濃の山にあり。以
 てそのあつめと。向れ弘元さしゆかの夜在下も漂流し。無死とある折。漢舟の
 助棄せし。そが宿所は伴まゝ。其処の一宵。曉せし。不意隊兵が索す。あ
 る。環會をたふさる。當國飯田山。川角頓太連。盈と。山賊あり。下の小
 賊五十餘名を後へ。彼山の洞を小寨とす。抑件の連。盈。近曾。菊池
 武俊が招き。心とく。阿蘇山の城。管。や。不忽地。心。変り。武俊が軍要
 金四五百兩を竊取り。下の賊と共に。侶。逃。飯田山。小。帰。了。と。由。を。定。ふ。小
 生。る。の。ひ。ひ。死。是。ふ。より。在下。の。連。盈。ホ。と。捕。捕。ん。為。隊。兵。と。お。く。彼。山。小。推。寄。せ
 たり。如此。々々。小。計。して。遂。小。連。盈。を。捕。捕。す。その。餘。の。奴。原。の。或。の。砍。伏。せ。或。の。生
 拘。で。洞。の。石。門。を。焼。毀。て。その。巢。穴。を。帯。ひ。ひ。死。令。小。連。盈。の。初。眉。を。深。瘡。と

堪む。次の日山と下はと死途あり。息絶ゆを首領るれ。賊。即。首。級。を。齎。す。
 たり。且。生。拘。り。小。賊。ホ。五。六。名。死。す。と。これ。ら。二。棄。く。首。を。捕。ら。せ。め。く。
 その。宵。の。旅。宿。ゆ。く。管。領。の。諸。軍。を。牽。く。阿。蘇。山。へ。寄。せ。め。ひ。と。風。声。灰。小
 宵。え。り。夜。を。日。小。継。ぐ。路。を。急。死。馳。く。彼。山。の。麓。を。阿。蘇。谷。小。走。著。り。小
 菊池のを。落。亡。され。管。領。の。心。を。釋。く。大。伴。太。宰。の。兩。將。と。共。ふ。の。処。ま。ぐ
 退。死。の。ひ。ひ。と。彼。処。の。里。人。ホ。は。傳。言。く。心。い。く。慌。く。時。を。移。さ。せ。お。迹。を。慕
 ひ。く。只。今。參。著。せ。り。在。下。主。徒。脱。れ。死。命。を。保。る。の。と。む。武。俊。は。舊。縁
 あり。山。賊。を。討。滅。せ。り。是。將。軍。家。の。お。ん。餘。光。且。管。領。の。威。福。の。因。を。厚
 の。邊。參。の。趣。め。く。と。言。詳。小。報。り。義。兵。斜。に。斜。る。と。ち。合。笑。を
 額。と。指。く。這。回。某。辱。の。武。俊。討。多。の。搥。大。將。を。奉。せ。り。甲。斐。も。多。く。賊。徒。の
 多。く。落。亡。と。ト。び。も。刃。と。す。を。贖。不。慮。の。水。火。の。より。く。鞍。の。士。卒。を。喪。ふ

たれど。歸洛の日將軍家へまうし。釋人辭のあらむ。さうさうの心のあやむく。
 いふせまりとどひ不乐い。御邊圖らむ武俊が餘類を一本討滅せしむ。
 某さへ面を起す。是莫大の勲績。あらむ社頭のふり。あれ本陣をまへりて。
 首級実檢め及べし。先度某この地ゆく士卒を多く喪ひし。この社頭を年々
 麻毒毒蛇の所為とあへり。人の口を戸も建られむ。その毒蛇と殺さば何を
 して死する。士卒の魂を慰むべし。とどひよけれ。如此々々計りて蛇穴を焼崩し
 件の怨を復し。其も是より。本陣の穴を長途の痕を想へる。と
 亦他事も多く。心の中ゆき。初これ弘元が博士態を諫言の快く
 ありけり。その言葉果々當り。是よりこれを悔るべし。いふせまり。とどひよ
 元不測の功を立。菊地が餘類の山賊の首級をふ。齋せし。つが為小忠ありと
 あり。然るを得。と。執念深く崇る。人あつと。とどひ久らうら解る。心會

叮嚀するけれ。親春も教頼も又大内が光黨近習の弘元を労め。齊一書
 已げりけり。却説大内義貞と雑兵ホ火を滅させ。灰を掃帚し。親春教
 頼弘元ホと共侶の蛇穴のほり。お敷せ。つらくと見をる。白蛇の火攻の苦
 堪ざりけん。穴より半身を出る。送る隈を焼亡。その白骨兩骸。頭
 骨の大なる。正初挽臼も勝るべし。この餘小蛇の骨より。されこの為体。筋
 その毛骨竦まき。駭嘆せ。いふ。その中。小義貞とつくと。とらち微笑
 人々何と。多ひある。も。靈蛇といひ。虚名。入。寔。火ある。物。雲を起。雨。降
 火。火の害を避く。べし。焼れ。骨の。苗。め。その。靈。を。知。る。死。の。衝。に。立。村
 煙の中。小怪。蛇。の。頭。れ。皆。觀。者。の。惑。ひ。を。譬。に。杞。人。の。目。を。患。て。日。華。を
 是。同。ト。疑。心。暗。鬼。を。生。む。と。い。ふ。世。の。常。言。の。以。あ。る。あ。必。こ。ら。ふ。け
 ぬ。人。不。笑。と。笑。れ。武。士。の。恥。る。家。隸。ホ。も。あ。る。あ。る。せ。

雑兵小口と噂せむと誇自小窘を衣皆齊一額を死く美りぬと
応けり既事果與嶋る義與と社頭を去く野の士卒を前後小立し
細搔線三歳駒の足搔きつる陣所小死れ親春教頼の途より別れ
その隊の陣へ退れり當下麟角院法橋の義與の後小跟り送り陣門に
ほとり小赴れ礼を舒く宿院小退居程弘元亦義與が陣所小到り連
盈が首と生虜を實檢小備へ且分捕の金銀を去り披露及び義
與則生虜の小賊小京師を去り牽づるに士卒小下知と頭顱を刎き
皆陣前小梟さる惟連盈が首級を京師へ上せんとその準備あり
つて旋果よりこの地小所要むる義與と夜さ弘元を招いて
某の翌の朝親春教頼小相伴之急に帰洛小赴く下御邊ハ殊さ大
功あり共侶ゆととせむと武俊既小落亡とせむと其の往方とせむと渠當

國小躲居る後の患とせむとの御邊ハ姑くこの地小送りく這奴が所在とせむ
數金去り當國小原田の徒去るは死武士を死あわねとせむと其の
邊の外小ありとも賞を其這回凱陣の日小御邊の功ハ送むる將軍家ハ
あはく恩賞の後日の御沙汰及ん且當座の牽出物ハ賊の巢穴焼毀
ちと死分捕の金銀とせむと御邊の所得小ありとせむと懇切小私恩を
被け説示せむ弘元その金を受む謹むは口から仰美りゆひ取とせむ
ども年来の兵乱小民疲勞上の財用乏し折より九牛の一毛とせむとの
金銀を受奉る臣との志小ありとせむの許させぬとせむ幾遍も只固く
辞ひ受づるもあられ義與いよく賞嘆しく御邊ハ實小廉直入九世
武士たるの誰ゆとせむあるはれこの爰も披露及び小死件の金銀ハ水
為死する士卒の妻子小分與んとせむ一談中果弘元陣後小退居

ひつり 熟思ふやう。皇表のり。主従の必死を赦ひて。山賊を討と誨。素宅六夫婦
 の阿蘇沼邊の年ゆり。雌雄の白蛇の化しるるらん。その所以を甚麼と推
 して。彼漢者の姓名を即子自素宅六を。妻の名を綾女といひ。素宅の
 素は白蛇の字の片簡を子より六目小當る。これ已り。已も亦蛇。且蛇の
 異名とあやめ。その然。永美年間。殿上根合。良暹法師が筑摩江の底のゆ
 さとをさう引るあやめのねを考ふる。とみんと。あやめの立里女。常小蛇蝎と
 して。右府の難トあひとや。裕といひ。恰といひ。素宅六夫婦の白蛇をい
 今や。御くまひひ。彼小が命数竭れ。仇の為。逼られ。その死期近。あ
 と。大内殿は。焼殺さる。と豫て。より。知るるん。の靈蛇も。前世の業報。小
 よ。左の右の。腹れ。げん。穴も。去る。猛火を受。灰燼と。りて。亡し。
 必。不便。の折。升。煙の中。西。箇の白蛇。のえ。を。て。宛。魂。あ。ん。が。

然。あ。く。も。彼。白。蛇。小。戦。捷。さ。る。五。雀。の。鳥。の。何。ホ。の。因。縁。を。天。機。の。測。り
 が。け。れ。も。靈。蛇。を。殺。せ。し。官。領。の。久。後。い。と。心。と。り。縦。七。の。身。小。報。り。と。も。
 子。孫。の。為。小。と。祥。あ。ら。ト。以。難。一。の。是。の。ま。る。と。素。宅。六。夫。婦。が。贈。り。と。る。
 彼。草。葉。も。亦。奇。る。あ。ら。外。朝。劉。宋。の。武。帝。が。賤。一。り。死。蛇。穴。小。入。
 獲。り。と。劉。奇。奴。草。の。類。多。款。件。の。草。の。主。従。の。饑。小。元。る。物。なる。あ。
 きの。途。を。皆。失。ひ。今。の。一人。も。一。只。彼。飯。田。山。の。地。圖。の。幸。以。中。々
 あり。あり。と。ひ。と。り。こ。ら。取。出。し。と。披。き。再。見。小。初。の。地。圖。の。耗。矢。せ。四。言。四
 句。の。漢。語。あり。と。何。の。付。麼。の。と。怪。る。と。晴。夜。定。め。と。く。視。れ。が。
 今生相識。 來世做仇。 木免參處。 是興亡秋とあり。と。あ。り。と。
 さ。る。思。へ。と。の。句。の。讀。易。と。く。の。意。の。究。め。悟。り。難。の。要。あ。る。と。と。子
 小。の。麓。底。小。秘。と。遂。小。又。人。小。知。ら。は。是。と。の。後。年。城。歴。と。の。子

音訖の成長よりと宛白蛇の事と其示く件の隠語を在りとも然程に大内
 義興とその次の日大伴親春と太宰教頼と相伴て三將の軍兵四千
 餘騎既小帰洛を赴けを弘元は阿蘇郡に留りて武俊が往方と索
 へ此の便宜もぬりけり凡る逗留の間麟角院と相譚ひて白蛇の骨を
 その処に塵め灰をよむ塚を築き標識の弱樹の標を植けりよと土人
 こそ名つけ。蛇塚と喚做し。弘元もわけても飽む是年の秋安藝の
 采邑あり。比素宅六夫婦茂追薦の為法師を聚合し経城
 讀し石塔婆を建て町喧ひ吊ひけり。まことの意を人々志し弘元の
 後の苗害と思ふゆゑ飯田山を賊巢と燒毀く。其の金成受て又義
 興と士卒の敗亡を羞く怒を積し阿蘇沼を燒て漫の後の患を
 免む行ふ所と相似れとも用心各異ると識者の評論ありけり。

第四回

御廟野小興房阿夏は遭ふ
 鴨河原小兩情春夢を結ぶ

却説大内義興と大伴親春太宰教頼亦を伴てその夏四月の下瀬興る
 凱陣をせけれ室町殿へ出仕と菊池武俊が没落の支の趣并小安藝列の人
 氏備中弘元が自己の天覚をて武俊餘類する川角連盈といふ肥後の
 飯田山を寨を在り推寄り討滅す。その緯の為体とをあげ且親春教
 頼と將軍家儀植の見参ゆを入まけ。その日義興親春教頼亦各土産の貢
 献あり登時將軍のみづら縁由と聞食て義興亦を必ひひ武俊を落亡
 九州を異に治りて皆是管領の武畧とあり和泉紀伊の二ヶ國を鹿苑院殿
 將軍のち時當管領の曾祖にける大内義興小加恩の地多しと義興不軌の行
 いあり一旦滅亡の折彼二ヶ國を召放され。とてこの回の勸賞とて和泉州

城の城不如千の城地を添く賜ふ死よと仰あり九州を異なりぬとの武俊が
 往方定るる親春教頼の来地を立火の非常の備急を又連登
 首級例小任と河原小島で悪を懲り遠近人を示す一就て賊徒討亡せし備
 中弘元高肥後小ありといへ彼地へ感状を賜るる義もあるゆゆと送る
 披ひひ義貞とれを奉りて形をくひひ親春と教頼の京師の逗留ひ
 日もある各々の隊の兵をぬく皆本國を還りける是よりと義貞の權威を日
 倍々在京の武士の公卿殿上人までも或の凱陣の詩を述或に加
 禄と賀するもの幾百人といふこと知るも前日々小市のど絡繹として絶るけり不
 題大内義貞の近習の士陶瀬十郎貞房とのありけるを素生と厚に大
 内家第一の光黨と喚えし陶遠江守政房が子への身遊津多りければ周
 防の山口ありけるを春主の義貞が菊池武俊征伐の為山口の城ありし
 召出るとその軍陣の後めを京師へ移りて身邊近く使ひけり叔も這瀬
 十郎の今茲廿二の女女子中てを欲し相親と美しく心る亦風流を好
 る詩を賦一歌をよむ疎幽るを且雜樂艷曲の技をまら愛飲むとのこと
 るそれいとも多くより言執事ありさる周防に在り一程を人由言ゆれば亦
 ちるる自なりける今茲皇城の地を踏初て京師の多ゆりてより心裏恥
 羞の言より日野西中納言兼頭卿及萬里小路中納言賢房卿を大内
 家と疎々の由緒をいすければ瀬十郎の勤仕の暇ある母必まの二位君
 遠を訪なりて歌をよみ又雅樂音律の技を問答する兼頭卿も賢房
 卿もこの時高尚生上達部ゆく年齢の共弱り志仁の兵乱以来公家武家俱に
 衰微して朝の相細るる貴人へ稀るる日野西萬里小路の大内家の資けり
 よりと多しとをいさればこの方さる人として召入れく對面あるるに沈瀬十

城の城不如千の城地を添く賜ふ死よと仰あり九州を異なりぬとの武俊が
 往方定るる親春教頼の来地を立火の非常の備急を又連登
 首級例小任と河原小島で悪を懲り遠近人を示す一就て賊徒討亡せし備
 中弘元高肥後小ありといへ彼地へ感状を賜るる義もあるゆゆと送る
 披ひひ義貞とれを奉りて形をくひひ親春と教頼の京師の逗留ひ
 日もある各々の隊の兵をぬく皆本國を還りける是よりと義貞の權威を日
 倍々在京の武士の公卿殿上人までも或の凱陣の詩を述或に加
 禄と賀するもの幾百人といふこと知るも前日々小市のど絡繹として絶るけり不
 題大内義貞の近習の士陶瀬十郎貞房とのありけるを素生と厚に大
 内家第一の光黨と喚えし陶遠江守政房が子への身遊津多りければ周
 防の山口ありけるを春主の義貞が菊池武俊征伐の為山口の城ありし
 召出るとその軍陣の後めを京師へ移りて身邊近く使ひけり叔も這瀬
 十郎の今茲廿二の女女子中てを欲し相親と美しく心る亦風流を好
 る詩を賦一歌をよむ疎幽るを且雜樂艷曲の技をまら愛飲むとのこと
 るそれいとも多くより言執事ありさる周防に在り一程を人由言ゆれば亦
 ちるる自なりける今茲皇城の地を踏初て京師の多ゆりてより心裏恥
 羞の言より日野西中納言兼頭卿及萬里小路中納言賢房卿を大内
 家と疎々の由緒をいすければ瀬十郎の勤仕の暇ある母必まの二位君
 遠を訪なりて歌をよみ又雅樂音律の技を問答する兼頭卿も賢房
 卿もこの時高尚生上達部ゆく年齢の共弱り志仁の兵乱以来公家武家俱に
 衰微して朝の相細るる貴人へ稀るる日野西萬里小路の大内家の資けり
 よりと多しとをいさればこの方さる人として召入れく對面あるるに沈瀬十

郎與房の彼家の光權る。陶政房が愛子も大なるに款待し、辭
 敵小まの少を瀬十郎といと辱しとせしむ。暗譚小夜を深き正屋するに有
 如之程小陶瀬十郎與房の一日十禪寺村の邊小私の所要ありて赴死せしむる。夏
 夏の日れ癖るれ。御廟野の邊ゆく。猛々夕の雨ぬりちぐ。小雨具をのみる。只一箇
 只一箇をり。後者小傘を借りて来り。栗田の相識許走り。され
 あり候んぞと。路の傍小荒傾死。圓通堂の檐を仰上り。遽しく走り
 入る。これより先小あぬ。必やどりま。床のありけり。年紀十八九と。何
 老一箇の女子の人待小あけ。顔の暮春の桜花の如く。雨小空雲色。風小
 惱る風情あり。汝小仲秋の新月に似て。雲を恨み。雲を遅しとせしむ。西施が心と
 患ると死。太真が渴小堪ざり。ゆ。や有けん。とある可る。小羅衣る。花小
 ゆく。頭上の飾も。玳瑁白銀のいろくる。流行を上り。とせしむ。瀬十郎といと

ありぬ。目の頻り。あち騒れ。問よれ。ぐ。日。あ。ち。女。子。由。亦。瀬。十。郎。が。傳。言。又
 らぬ。男子風流。ま。ち。も。あ。ろ。あ。ち。秋。波。小。そ。う。ち。微。笑。ま。や。小。殿。足。方。へ
 入る。其処の湿吹の被る。け。六。朝。より。よ。く。晴。る。も。虚。憑。め。あ。ち。ゆ。り。死。と。押。々
 表は。あ。の。ひ。ひ。声。宛。賞。の。初。音。小。似。る。春。る。と。春。の。心。の。動。死。初。瀬。十。郎。も
 又。死。り。く。噫。聲。は。る。あ。ち。亦。あ。ち。露。間。を。ま。つ。あ。ち。あ。ち。從。者。を。俱。あ。ち。だ
 や。と。問。は。く。身。邊。小。立。れ。ば。女。子。も。有。數。系。小。恥。の。森。の。木。葉。飲。の。み。ち。ま。顔。を
 背。向。く。は。れ。が。ま。妻。と。大。津。小。所。要。あり。と。ま。の。彼。処。小。赴。死。し。又。ま。ち。は。は。か。り
 伴。る。男。の。侍。り。ぬ。渠。の。衣。裳。何。れ。の。物。を。集。め。く。后。より。ゆ。ん。と。い。れ。れ。ま。う。ち。任
 みる。獨。り。を。死。甲。斐。も。る。死。臂。笠。雨。小。路。去。り。あ。ち。往。還。稀。あ。ち。十。字。堂。小。立。も。銷
 さん。日。の。惜。く。て。心。細。さ。を。限。り。も。ま。り。死。ぬ。時。と。憑。く。言。向。る。も。他。生。の。縁。一。樹
 蔭。の。笠。宿。り。あ。ち。身。の。脚。坐。を。程。の。心。に。ま。り。ゆ。り。何。処。の。殿。を。海。ま。ま。と。あ。ち。後

若の侍とむや。と問ひされ。瀬十郎とよ。不笑し。けふうち。領院。吾侪。二條の邊。
 某甲殿の家臣。後者。る。あ。ね。も。傘。を。借。せん。為。小栗田口。まで。走。り。た。處。が。
 いま。借。ゆ。く。帰。来。せ。ん。身。も。京。の。人。の。や。あ。ん。ら。ん。ら。比。東。る。處。太。田。持。資。入。道。が。い。そ。
 だ。濡。る。ま。ま。と。旅。人。の。迹。より。晴。る。野。路。の。む。す。雨。と。よ。先。方。如。く。且。く。俣。ハ。齊。敷。
 ぬ。雨。の。あ。ま。と。程。も。ち。く。暮。の。日。を。い。く。せ。ん。志。仁。以。來。京。師。ま。ら。荒。る。傍。の。處。
 け。り。況。あ。ら。り。人。家。の。稀。る。夜。行。を。い。く。女。子。一。人。を。い。く。ま。ん。や。宴。の。便。き。の。ま。
 こ。と。い。の。女。子。の。嗟。嘆。し。く。あ。ら。り。熟。路。を。う。り。宣。如。く。雨。の。歌。と。も。昔。春。ま。の。獨。
 歸。せ。の。り。然。れ。が。と。こ。這。十。字。堂。の。立。曉。ま。く。も。ゆ。る。ま。の。か。の。の。の。御。々。あ。く。て。い。と。
 せ。れ。り。と。お。不。さ。ん。然。れ。が。後。者。の。い。の。ま。の。あ。ん。傘。の。端。の。添。し。く。宿。所。へ。送。り。あ。ら。り。
 鄙。語。の。六。道。の。術。衢。を。佛。の。遭。ふ。不。似。の。は。け。の。か。の。の。の。小。慈。悲。善。根。を。も。た。り。功。
 徳。る。ん。の。か。の。妾。の。名。を。夏。と。喚。れ。く。宿。所。の。三。條。大。橋。の。あ。ら。り。の。借。屋。住。ひ。れ。

建造作。留守。ま。ほ。り。め。ゆ。ね。と。母。屋。の。名。を。酒。樓。ゆ。く。と。熱。鬧。の。商。賣。の。
 ぼ。背。の。地。尻。が。宿。る。ま。の。用。心。も。及。び。借。屋。の。い。と。不。樂。し。く。ゆ。れ。も。東。道。
 儲。の。母。屋。より。執。運。し。く。ま。あ。ら。せ。ん。け。り。あ。ら。り。の。ま。の。の。と。懸。せ。の。と。他。事。も。い。く。の。
 津。舟。の。り。り。の。虚。を。あ。ら。り。の。瀬。十。郎。の。心。を。沈。吟。し。く。と。飲。み。た。ま。ら。り。の。彼。瓜。
 田。の。履。下。の。冠。人。の。疑。難。の。影。護。の。弱。死。婦。人。と。二。傘。を。方。あ。り。と。送。り。ま。ん。
 や。の。の。の。聽。き。ま。ら。り。の。笑。ま。ら。り。の。宣。の。の。の。人。視。ま。ら。り。の。白。晝。の。の。の。影。護。の。
 の。も。あ。ら。ん。を。小。歌。の。今。あ。ら。り。の。雨。夕。あ。ら。り。の。途。中。の。暮。ん。柱。の。救。ひ。の。の。の。
 口。説。き。果。る。折。り。の。瀬。十。郎。が。後。者。の。栗。田。口。を。借。得。る。蓑。笠。を。身。小。着。七。雨。
 衣。木。履。傘。を。引。提。ぐ。頻。り。小。走。り。ま。の。這。十。字。堂。を。忘。れ。て。ゆ。り。過。ん。と。の。程。の。瀬。
 十。郎。や。や。と。呼。返。し。く。や。の。折。り。俣。不。樂。し。く。の。の。の。婦。人。の。こ。れ。より。先。の。の。の。
 間。を。ま。の。雨。の。生。憎。の。歌。ま。の。昔。春。の。の。の。三。條。の。の。の。宿。所。ま。の。相。傘。を。借。ん。と。

斯と知る傘を彼処に二柄借せん今あつたその甲斐るといふ折々のこと
 足と痛き死のふるえ此の細雨のうらみれが傘の片端を貸あふ共侶小
 濡さをもふのあら下どもあつた誘ふといひて袂小包る雨衣とより生まを
 瀬十郎推禁めく現汝がいふと既小細雨よりくるる雨衣被ていふ暑者り
 その俵小包も持ひよや濡るとも麻衣の袂涼くるんのか喃阿夏とあふえ今
 ゆら捨て去が死便路るが送へ。され足駄をいひせつれと跣足もいひの
 折々それをまゐらせよといひ袴の稜と揚る阿夏の急推禁めてその物
 体るるふゆる傘の庇を假初るら送らるるうふ。お牙の足駄をいひあふ辛か
 穿くいれんや。あひもけぬいれんと推辞ら恥く遠く裳褰はく副帯と締
 易んとま程の折々の獨笑と女中且く等々のあれ片隅の小暗死處小女子け
 足駄一雙あ。這御僧小詣一者の置送れ。袂脱捨一袂とまされいふあれ。

臍塗足駄の已時るるあつたも草緒で沾氣る。いふと真実をいふ取れは
 推直を阿夏のいふ合ひ咲く。あつたあひりけり物怪の幸々侍の。この年来
 清水寺の觀世音を信はれ地方のれども亦あつた菩薩の利益ふて
 有の死すも尊やと要時本尊を伏拜め。瀬十郎もあれをえ。彼太山は貸
 わの心算るる。いふと得。と老氏のいふあつた細小る物るれも時取て
 千里の駿足圖らけり。大志冥助歎寔小奇り妙りけり。よく出る。いひ
 かけ先あつた傘を披く轆轤の出納牙の。郎あひけの草鞋を其処に
 脱棄く足駄穿ひ立出。阿夏が迹折々の立替る。取揚る裏附草履
 うち合。主の半履共侶小二雙扱。いふ伴態を。阿夏のいふと抗て憚ま。い
 とまろ小夕暮近野路の雨あり郎と相合傘の。入視平は。横頻吹濡。先
 こそ今。いふ厭ひせ。百穂の露の命。よ君が為小照る。日の岡も數る。雨と今

御座野路
 次尔夜瀬
 十郎阿夏
 を送る



長次郎

折入

出像第六



笠屋

美山集巻之三

美山集巻之三

世

十餘計

宵の媒妁とての娘一傘の柄のよきもなきも
 部山吉田黒谷横あそびとゆる
 凸凹高足駄路の泥土も苦みあうと後の敷たのま川橋の尚秋風の吹ゆと
 阿夏瀬十郎が悪因縁むすび初言賀茂河の水漏すととるの白月たそく
 宿所の著者よけり登時阿夏の遠く懐希の間より鑑より出の戸開て走り
 入る火と鑽てもそ行燈小程を程瀬十郎の門邊より告別と去るを
 阿夏のやと叫被く袂小携掖留めとひうけるは底栗ぬく足も汚さぬ濡も
 せむの著者飲びと沿述むくこの尻小果敢る還一まらんや家路を急死
 ぬとも暮果くま程のほらむ枉く且く憩せぬとつらむく留めく放さぬ瀬十
 郎の又さる小心よめて揮も拂むをそと時宜るらぬふとをと言ふはと阿夏と
 と引まき上座小坐とられ折女も笠を脱ぐ框小尻をけり有り右阿夏と

背門小立く堂もうち鳴る母屋より心と答て一箇の小廝の走り來ぬを
 ぞ久耳と掖ととる如此々々と其くぬを小廝のあらぬ果く退る時を
 復ては教を廣蓋と唱る塗折敷小処陟ま種々載くのて來
 るを障子のほら小措したる阿夏の折女をえりくかん身も薄酒一椀
 まらんととて人もさけき母屋へおぼひの隨ふたそる
 幸ひるんといふ瀬十郎推禁めくゆるの義及んうち捨く措る空
 り間小母屋の小廝の底間よりうち遠りく折女がほととる家内と仕ん
 是方人來ませと誘ひ折女の立難くととる悉くはととる死迷惑仕ぬ
 うち置一のひと陽辞ととる捺む小廝のる母も推立くととる依母屋へ伴
 ひけり當下阿夏の莞安瀬十郎うち對ひくととる特さら端近ら燈樓へ
 登るせのひとといひととる躰と燭臺の火を程携く先小安内成まを

瀬十郎と懃心去りぬる船の不安の中を。さきの曾小支の刀焚把と。
登る階子の恋の山浮名取川最上川瀬の濡る阿武隈川迷ひ初道
かゝるこの陸奥の名蹟の京師もある心地と。空を頭と廻し下を這
魁楼の席薦六畳と布設の東のふ置床あり次の回を半の夜
物を斂る料多。棚架多べ二枚の蒸襖と建てる。柱の桜の花笠牡丹の
扇笠両三箇と近属より世間小弄の三弦胡弓をどと拭う。ぬれぬ這女ありの
絃管とりと世を渡る歌伎るらひの儂姫あるん。とやゆき猜するのさし詳る
るを知る。却説阿夏と酒散を。老を矮樓小運び登らん。さへ奇しむ縁
あく今より親くるせぬん見参るをぬはれぬと恥しむ敬待小御足を駐め
まあるせし。妾があつる生むとも大抵猜しぬけぬ春花より芳し君が御
名をせまほくれぬと。さしけく不盛と薦を瀬十郎の推辞小由る。定小不

測の値偶不依り某のさう後若さく酒食の御食心小あまの過世帯此飲ひ
かり今何さ思ひ死吾侪の大内殿の近臣多く陶瀬十郎奥房と嘆く。ぬ
あや四月の比より在番まされ京師のさゆり疎るを痛く思われん女ある
トゝあるとも獨居でむららん家内小人もさぬ夜飲小耽ると大膽不敵
罪ゆがま死支小と。とふを阿夏のうら笑ひと。噫のぬれ殿もさある妹伎の縁の
出雲多く神の結せぬふといひ送小宵月さち明く正木のらら末をく通せぬん
ひとの祈りとも外りぬるものさち鮮多。ささる。さの口懐。裡墨の土器る。ぬ
朱不常時繪の鶴と雌雄とる千歳と。とと客ある。の年齢の若の浦や蘆の
葉濡れぬ満潮のさうさされり餘念を酒の礼小始りぬ乱は終ると柱周の
けんも現宜るらね男女席を同らせる飲酒の則色の媒心猿狂ひ意馬走ら
瀬十郎とこれらふと。ささる。さの三輪のまき。酒の過酔も堪を輓

ねの果敢る死夢を結ひけり。その時後者折々の飽すく不飲食しく阿夏の
 宿所より泣き涙のどく小酔を枕小尻を拭き隨て反仰倒れ熟睡す。
 蚊の刺すも知らずけり夏の夜るれ短く枕小御普く明六の鐘小瀬十郎を
 驚覚く後悔するも大くおぼしむ。その小主君小願ひまうさる私小出さる。昨
 夕のさるる一幸向く外口もとも先輩の甲乙が程も影護し。いふま死
 と搔拍。顔と頬の小病をれ阿夏のまきと慰む。あつ別のを免むと唄ふ
 曲子の傳る逢ひまき色色の慾宿の首尾の今もあ。あ一分船の譯立く
 緒の樹の宿るまき。と阿瀬十郎沈吟と武家の門戸の限りあり。凡私要は出さ
 り。夜を犯しく還ると死の外はあむと。いふと。され練小便點る。さ箇様まの
 所以あり。吾侪をりの日野西殿と万里小路殿を訪ひなる。本日夜深でい居
 とも次の日に至るとも主君の許さる。あをりて朋輩も亦あのみと外口む。昨日

夕も日野西殿へ参り死といふ。斯誘許す。優とあら。といふ阿夏の胸押拵て
 そを飲し。紅の赤る首尾整へ。遠く便り。さといひ。といふ阿瀬十郎の懐の
 吊緒小拭う袴を。取卸して足踏。背後阿夏が腰板の切り分て
 推當る。まき。結二世の縁憑む。妹と瀬十郎の懐小あ。ける。自異紙裏を
 搔撈り。方位二枚とり。あ。聊る。物ま。酒食の料。といひ。紙拾を
 取らす。阿夏の受ま推返して。優る。小。財帛小愛て。客と惹く。宿遊
 女。の。信ら。ぬ。の。は。願ひ。の。を。後。者。の。取。り。て。口。を。鉗。め。後
 々ま。の。障。あり。と。いふ。瀬十郎の強り。と。且。美。く。領。く。の。意。を。任。せ。ん
 と。く。刀。引。提。く。遠。く。下。屋。小。到。る。管。階。子。の。高。足。音。小。踏。覚。さ。る。折
 々の。稍。身。を。起。し。を。と。慌。忙。忙。徐。と。直。ま。足。駄。の。兩。後。の。早。用。天。の。暗。く。も。う。ち
 濕る。竹。立。屋。阿。夏。が。別。路。の。名。残。い。と。鴨。河。原。情。郎。の。水。と。さ。の。水。の。目

送りけり。叔も這笠屋夏ハ親の名を續けるなり。これ母より一笠屋夏ハ女歌倅伎ハ
 大相也。大頭と云ふ。年来四條河原ハあり。常ニ歌舞伎を興約して生活したるハ
 忘仁の内乱ハ洛中も洛外も兵燹のあは餘波多。郊原荒土と云ふハ世渡り凡便
 著るるなり。初めハ終るるもあはば。程ハ母の夏ハ長病著者ハ臥りしより。朝
 角の相の病人と共侶ハい。細ら。今の阿夏ハ年二八なるなり。秋の比遂ハむろく
 るより。是よりと云ふ。女児の母の名を兼續て笠屋夏と喚れり。歌舞艶曲も容
 止もその親ハ優ずし。常ニ歌舞伎ハ勾欄絶てより再興もあはば。或ハ俳優
 或ハ小竹の技を。と云ふ。家の酒宴ハ招れ吹鼓舞奏ハ。高詩と述興と添と活
 業ハまほなり。今ハ母の夏ハ世ハあり。時伊勢ハ安濃津の商賈ハ末松屋
 木偶ハと喚る。年の毎ハ京上りして貿易と宗と云ふ。程ハ今の阿夏ハ春想
 考てこれハ金銭ハ費ハし。いとを。知。され阿夏ハ木偶ハ男態田

合備く。面の色如緒く。眼圓ハ唇厚く。鼻ハ左右の頬まで。阿夏ハ田樂能の獅子
 頭ハ相似る。忌嫌ハく。風ハ門の垂柳ハ非く。うも。木偶ハハ。懲
 び。樓下ハの。草。綾ハ。縁。思ハ。を。も。舊。里。ハ。も。也。ら。有。如。之。程。ハ。阿。夏。ハ
 母親ハ病著者ハ臥る。より衣食住の三ハ。も。資。る。の。の。あ。と。さ。け。ハ。況。某。劑。の。價。も。ハ
 此。集。め。も。藻。塩。草。足。ら。ぬ。世。帯。ハ。困。ト。云。ハ。木。偶。ハ。よ。う。と。賭。ハ。某。種。ハ。價。直
 貴。を。厭。ハ。む。晝。夜。と。も。く。存。回。ハ。資。と。も。と。大。く。さ。ら。ぬ。阿。夏。ハ。恩。義。の。如。と。被。れ
 親。ハ。ハ。疎。ハ。郎。と。枕。と。並。ハ。り。この。時。ハ。木。偶。ハ。ハ。年。來。ハ。本。意。と。違。て。の。活
 業。ハ。も。ま。つ。阿。夏。ハ。母。の。身。ハ。送。葬。の。事。ハ。法。慈。雜。費。も。總。て。木。偶。ハ。ハ
 囊。中。より。抓。物。ハ。物。の。の。ぎ。と。の。小。さ。ハ。限。る。情。慾。ハ。ハ。限。ハ。ハ。債。と。喪。ハ。ハ。の
 所。以。ハ。本。錢。ハ。ハ。舊。里。ハ。ハ。京。師。ハ。ハ。送。る。の。身。と。借。財。ハ。ハ。伊。勢。ハ。津。ハ。家。ハ
 庫。も。古。借。の。債。ハ。沽。取。ハ。ハ。妻。子。の。離。別。セ。時。ハ。幼。稚。ハ。女。兒。ハ。括。著。ハ。ハ。後。僕

東西の去り親戚義絶不及び木偶の悔も故郷より推上され五才への
 女見とも阿夏の宿所は寓居も阿夏の素より好む取郎も受る恩あり
 せしむともいふて遂にそれより木偶の今も本銭を
 けり阿夏の酒醺の席へ召れて彼此へ赴くも俳優の衣裳を携り三弦箱を肩に
 きて送迎せしむるこれ親子三人の衣食も古又足るも阿夏の暇も母に木
 偶が携りて女見は憐れみと誨るくその名を小夏と喚做り然程木偶の米
 薪の竭んとするを阿夏は招く花まるければ正に小夏を招く四條河原に立
 消し小夏は舞をまわしてその身は波管笛を吹死細腰鼓を鳴らし練の銭をゆき
 又して親子の口を餓れ日もありけり有之程の隔昨日は天津の良賈の家は算盤の
 酒宴ありと音曲のる阿夏を招き阿夏の女見を伴ひて木偶は衣裳三
 線箱を背負りてその家は赴死しその終夜の酒りも疲勞れそのは亭午

まぐ彼処より辞し去るとせし比小夏の腹の痛むと厠のひま時の程まぐ
 阿夏の木偶を送り置く小夏は瘡の果もまぐおのりぬとくひとり家
 路へ急ぎし御廟野の邊に夕立雨は笠をとりて圖らば陶瀬十郎の解近
 ちの木偶も小夏もその宵のつとと思ひあつたり瀬十郎を宿所も留めて
 事の其処不及るなり色の思念の外は阿夏の素より艶曲歌舞の生
 活とせむる弱女をば様を扇の松木傲不貞実節義疎しと外口も入る
 のるる後と陶瀬十郎の陪臣小夏をあれ米邑幾万貫り領しは陶遠江守
 政房が子も小路の柳橋の花も甚るれ心迷ひて人の議を思ひけり過せ
 老死悪縁之間話休題却説瀬十郎貞房のその日音領邸のりて阿夏の
 のの心小のりて送れんとする小夏は流の弦管を世を渡る歌妓も
 猜せども家の内に入るもあつるがはとふみぬてひねて同をたふすのり

とく。つゝ久。のま
 左ふ右よ勤仕小暇るり。五六日と過ぎ程有。一日相采曹の甲乙と江湖上の話
 説の序小瀬十郎へそれる。小三條大橋の西町は如此なる美女あり。と皆の申。渠ハ
 い。る。の。の。を。と。外。か。あ。く。諮。る。ふ。そ。の。人。々。合。笑。て。そ。の。笠。屋。夏。が。り。る。冬。素。是。渠。が。母
 親。の。女。歌。舞。伎。の。大。柏。を。死。今。は。夏。も。そ。の。技。小。堪。能。の。宮。え。あ。り。箇。様。々。の。美。女。より。く。
 未。松。木。偶。々。と。の。醜。郎。と。夫。婦。め。り。り。又。小。夏。と。吸。れ。て。年。五。六。可。る。小。女。見。あ。り。
 七。と。木。偶。々。が。推。乃。子。へ。夏。が。事。ハ。世。ハ。隠。れ。も。死。を。今。ま。で。知。ら。ぬ。疎。幽。小。之。渠。ハ。を。と。
 三。方。さ。あ。も。召。る。と。あ。り。と。皆。ぬ。況。市。人。の。富。る。の。の。渠。を。飲。酒。の。敵。み。り。之。艶。曲。を。
 聴。歌。俳。を。観。を。最。上。の。楽。と。な。る。も。り。但。我。殿。さ。の。の。管。領。の。重。職。小。さ。り。ま。る。れ。か。
 俺。們。の。世。の。憚。り。と。渠。本。と。召。す。を。招。め。る。れ。と。正。百。五。説。示。り。畢。竟。瀬。十。郎。向。
 夏。が。素。生。を。詳。小。知。り。て。又。甚。麼。る。話。説。り。あ。る。と。そ。の。次。の。巻。小。説。分。は。を。聴。ひ。り。

近世説美少年録第一輯卷之二終



